
平和な日々を君に捧げる

ぬ様

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

平和な日々を君に捧げる

【Nコード】

N1881U

【作者名】

ぬ様

【あらすじ】

天城>>テンジョウ<<ワタルの通う学校周辺で起こる無差別殺人事件。

求めていたのは平和な日々か、異常な日々か。

のーたいとる！

—— 続いてのニュースです…… ——

普段と変わらないニュース。いつもと違うのは平和な町を襲っている事件のニュース。この町を襲う、不気味な殺人事件のニュース。

「物騒ね」

食器を洗っていた母親の手が止まった。

「ワタル、お前大丈夫なのか？」

朝食は家を出る時間がほぼ同じ父親と摂っている。父親はすでにワイシャツとネクタイ姿だ。

テレビに背を向ける席が定位置の天城は、イチゴジャムが塗られたトーストをくわえながら身体を擦って画面に視線をやった。

「大丈夫でしょ」

母親は少し心配そうだったが、天城は楽観的だった。

「学校まで送っていった方がいいのかしら？」

「ワタル、母さんに送っていつてもらえ」

自転車で40分の学校は大して苦ではなかった。電車を使う手もあるが、自転車の方が融通が利くため、自転車で通学することがほとんどだ。

「心配しすぎじゃね？」

自分たちは絶対に関わりのないことだと思っていた。

「でも、貴方の学校の地域よ」

見慣れた町並みとスクロールしているテロップが液晶テレビの中に収まっている。

「今日は部活でミーティングもあるから帰り遅くなるかも」

トーストをたいらげ、湯気を上げているココアを飲み干す。朝食の定番ともいえる牛乳を天城は好まない。父親も朝食を摂り、排便

に向かうと家を出た。

母親の車で登校したため、帰りは電車だ。部活が終わる頃に迎えるにきてもらうのも悪い気がする。天城は小銭が無いことに気付くと、校門の前に設置された自販機に向かった。

——何がいいかな…

喉は渴いていない。特に飲みたいという物もない。だからといって飲めないような（天城は牛乳とコーヒーが嫌い）物を買ってもどうしようもない。

「あ、てーんじょー」

大きな声で名前を呼ばれ、天城は振り向いた。

180を越える男が人懐っこい満面の笑みで手を振って走ってくる。

「お、おはようさん」

白江^{シロエ}冷那^{レナ}だ。女の子のような名前を気に入っているようだ。

「何してるの？お釣り出て来ないの？」

「んー…何買おうか迷っちゃってさ。そうだ、白江、何か飲みたい物あるなら買ってやるぜ」

「わーい＼（＾・＾）／。じゃあこれ！」

牛乳が甘くなったような飲み物だ。

「なるほど、デカくなるわけね」

売り文句がカルシウムを強調している。

「牛乳は骨が太くなるだけだよ（V）o¥o（V）。オレは味が好きなの！」

「へいへい」

ボタンを押して、数秒後にガコン、と音がした。

「俺だって小学生までは牛乳毎日飲んでたんだからな」

じゃらじゃらと880円が釣り銭口に降る。天城は財布にしまった。

「てんじょーはこれくらいがかわいいサイズだよ、（＊、＊）」

白江は天城の頭に手を置いた。

「お前がデカイんだよ！今いくつだよ」

「じゅう……」

「身長」

「ひゃくはちじゅうはってんなな」

ストローをパックにぶすぶす刺しながら白江が言った。小さなアルミの円形の部分に上手く刺せないようだ。

「長身っていいよな」

「オレは小さめの天城好きだよ（／＼ 3）」

「お前に好かれても嬉しくないっつの」

天城の身長も平均よりはある。白江といるために小さく見えてしまっただ。

「てんじょーひびい（…）」

「ははは。ホモか――」

微かに、でも絶対、救急車とパトカーのサイレンの音が聞こえた。

のーたいとる！

「てんじょー？」

ぼーっとする天城の顔を白江は覗き込んだ。

「今朝のニュース、見たか？」

パトカーのサイレンなんて年中聞いている気がするし、懐かしいとも思わない。救急車なら尚更だ。

ただなんとなく新鮮に感じた。

「見たよ」

「ここら辺の通り魔のやつは？」

「見たよ。被害者って隣町高校の生徒だったんでしょ」

被害者のことまでは知らなかったが、白江が朝のニュースを見ていたことは少し意外だった。

「大変だよ。犯人は誰なんだろう？」

「正気の沙汰じゃねえよ」

「うん？」

「気でも狂ってるんじゃないかってこと」

白江は不思議そうな表情で天城を見つめた。

「分かるの？」

「え？」

「なんでもない（＾＾）」

白江はズズーと音を立ててパックを潰した。

「行こ（＾ｏ＾）」

校舎に埋め込まれた時計を指して白江は笑う。 7時半。 学校は8時40分から始まる。

周りに生徒はいない。 今日朝練のある部活は天城たちの部活しかないのだろう。

「遅刻すると渡島^{わたしま}にどやされるな」

天城たちは部室に急いで向かった。

のーたいとる！

「あ、2人ともおはよう」

部室の扉を開けると3年マネージャーの龍宮司たつみやつかさがいた。

「龍宮さんおはようございませう（／＼、／＼）」

「ちわーっす」

部室は静かだ。

「先輩等は来てないんすか？」

「まだ来てないよ」

「渡島は（？―？）」

部室には龍宮が1人だけ。毎回龍宮より早く来ている渡島も見当たらない。

「渡島君もまだね。でも城崎君しろさきは朝練も部活も出ないって」

「城崎何かあったの」

「分からない」

「城崎いないと一年がな」

城崎は物腰柔らかいからか、穏和な印象を与えるせいか、一年に好かれている。一方で少し乱暴めな天城やマイペースな渡島、一年より頭が幼い白江は好かれているとは言えなかった。

「うーん、どっちかっていうとオレ達って舐められてる方だからさー」

「城崎みたいに威厳のあるタイプじゃないからね」

「ああ。大変なんだね」

先輩も後輩も来ない。部活が休みなのなら事前に部長からマネージャーである龍宮にも話がいくだろう。

ただ、もう一人マネージャーがいるのだが、姿が見えない。

「早乙女マネージャーは？」

龍宮と仲の良くないマネージャーのことを訊くのは躊躇われたが、部長はこの二人の仲のことなんて知らない。早乙女の連絡漏れかもしれない。

「見てない」

「早乙女マネージャーがどうかしたの？」

白江は「何言ってるの!？」といった風な表情で龍宮と天城とを交互にみた。

「あの人なら連絡漏れしてても大丈夫そうな神経してそうだったから」

天城や白江の早乙女マネージャーについての悪態を説明するにはま部活の人間関係を説明しなければならない。

天城たちの部活の先輩は理不尽なりことで怒ったり、娯楽のよう

に罰ゲームを与えるのが好きだ。いつからかそんな先輩に媚びて罰ゲームや先輩いじめを免れようとするグループと普段と変わらず自分を貫き通すグループに分かれてしまった。理不尽な理由で罰ゲームを与えられても参加せず、ただ練習に参加するだけ。

天城たちは後者のグループだった。前者のグループとは仲が悪い。

そしてそのまま2年に上がってしまった。2年になってすぐくらいにマネージャーが入った。早乙女マネージャーと龍宮マネージャーだ。

早乙女マネージャーは先輩と媚びてくる後輩の面倒しか看てはくれなかった。一方龍宮マネージャーは先輩には冷たく扱われ、天城たちの面倒をよく看てくれていた。

「今部長にメール送ってみるね？」

「すみません」

龍宮が携帯電話を出したとき、部室の扉が開いた。

「おはようございます」

一年の和泉だ。^{わいすみ} 渡島には「いずみ」と呼ばれている。

「おはよ（ゝ）（ゝ）（ゝ）（ゝ）」

のーたいとる！

「和泉」

白江が和泉を呼んだ。返事が無い。シカトか。珍しいこともあるもんだと思いながら天城は和泉をみた。

「・・・はい？」

返事は随分遅れた。

「大丈夫か？」

白江が話そうとする前に天城は和泉に訊ねた。

「え・・・ああ。すみません、ぼーっとしてました」

「そうか」

「今日部活無いか訊いてない？」

「はい。訊いていたらここには来ませんし……」

確かにそうだな、という言葉を読み込んで、天城は朝練の準備を始める。

「あ、部長からメール来た。今日は、普通に朝練ある……って。それにしても遅いね」

「部長は何やってるんですか」

「部長はもう学校に来てるよ。委員会があつて朝練には出られないんだって」

龍宮が携帯電話をしまいながらそう言った。

「部長さんいないのかー」

「それで、俺に何か用ですか？」

和泉が白江に訊ねた。

「うっん、なんでもない（、）そういえば今日城崎休みだった」

「え、．．．あ．．．そうなんですか？」

「何か汚いものでも拾って食べちゃったのかなー？」

動揺しているかのように見えた和泉。

「城崎先輩なら．．．．．」

「ん？」

「何でもないです」

このとき、天城や白江がこの動揺に気付いていたら、事態は何か変わったのかもしれない。

暫くして部員が集まった。渡島と城崎のいない部活はどこか新鮮だった。

のーたいとる！

教室に入ってすぐにチャイムが鳴った。遅刻しないように朝練は終わるものの、着替えをのろのろとしている余裕は無い。

席に滑るように座ったがチャイムが鳴っても周りはうるさかった。同じクラスである城崎の席は空いていた。学校を休むとは思わなかった。1年と2年の今まで休んだことがなかったような記憶がある。

がらつと教室の前の扉が開いた。俯いた暗い表情をした担任の顔と、腕には菊の花。長細い花瓶の中で揺れている。

騒がしかった教室がその雰囲気凝固に凍りつく。

「せんせ……？」

何も言おうとせず、俯いたまま教壇の表面を凝視している先生。菊の花と、たった一つ、誰も座っていない席。城崎の席。

「今朝、城崎が死んだ……。いや……。殺された……。」

後頭部を強く殴られたような、痛覚はないけれど、そんな衝撃。

聞き違いだろうか？

周りの音がどこか遠くに感じる。

「連続通り魔殺人事件の……っ」

朝に聞いた救急車のサイレンの音が蘇る。

あの時だろうか。あの白江と連続通り魔殺人事件の話をしていた
時のことだろうか。

自分達が呑気に過ごしていた時に城崎は殺されたというのか。

実感が湧かない。

「城崎……」

城崎の姿は脳裏に張り付いたまま、離れようとはしない。

「すぐに全校集会が始まるから、準備しろ」

先生の声が大きく感じた。

全校集会で体育館に集まってみれば、隣の隣のクラスの列の真ん中あたりの所にいた白江が青白い顔で天城を見た。

校長の話は、本校の生徒が事件に巻き込まれ死んだこと、隣街の教諭が事件に巻き込まれたこと、今日は原則部活は無しで早帰りになる、ということだった。

「てんじょ」

教室に戻る途中の廊下で、青白い顔をした白江が天城を呼び止めた。

「なんだよ」

現実味を帯びていないからか、自分の冷静さに自身も驚いた。

「……城崎のことなんだけど……」

「城崎は、死んだんだろ？」

青白い顔の、眉間が寄れて真っ黒い大きな瞳が潤む。

「てんじょ……」

信じられないという表情で白江は天城を見た。

「ちょっと俺も事態がよく呑み込めてないんだ。ごめんな」

目の前の罪悪感リアル。

「……………」

黙りこんでしまった白江。ひどくいらする。こんなとき渡島ならどんな毒を吐いてくれるのだろう。

冷静なのにどこか冷静になれない自身にいらつき、何も言わず白江の前から立ち去って教室に戻った。

通夜の時間を告げられるとすぐに下校するように言われた。

教壇で俯く先生の落ち込みようが城崎の死が認識し切れていない
天城には哀れに感じて胸が痛んだ。

玄関で上履きから下履きに替えようと腰を曲げたとき、聞き慣れ
た声に呼び止められた。

のーたいとる！

「龍宮先輩」

2年と3年の玄関は同じだ。

「どうしました？」

龍宮は白江とは違う。天城と同じように城崎の死を認識しきれないのだろうか。

「城崎君、ちゃんと連絡くれたんだよ？朝、メールで！部活も出られないって！」

どこか責めているような口調だ。泣き叫ぶと表現するよりは、怒っているような、責めているような口調。

「だから俺にどうしろって言うんですか」という台詞は呑み込んで、天城は何も言わないことにした。何を言えればいいのか分からないのだ。龍宮は暫く何か言っていたが、天城は聞いていなかった。

「どうしてこんなことに…」

「俺は渡島のトコ寄るんですけど何か用事あります？」

一段落した隙にそう言った。

「気を付けてって伝えて。天城君もだよ」

龍宮の眉間に皺が寄る。

「分かりました、伝えておきます」

草臥れたスニーカーに履き替え、龍宮に背を向けると手を振った。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1881u/>

平和な日々を君に捧げる

2011年10月8日20時51分発行